
そして物語は始まる。

らいとてん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして物語は始まる。

【Nコード】

N05270

【作者名】

らいとてん

【あらすじ】

竜族が支配する世界の居酒屋から始まった恋。

それは、いつもと同じ夜になるはずだった。

——彼と彼女の物語が動き出す。

穏やかな夜

「レフィー！」

居酒屋の喧騒の中で、女主人ミーアのよく通る声がレフィーをよんだ。

「はい！」

黒い髪と瞳を持つ、17歳ぐらいの小柄な少女が声を張り上げて返事をする。

彼女の勤める「踊る子馬亭」は、今晚も大繁盛しており、怒鳴らなければ、相手が何を言っているかもわからないぐらいだった。ドンツ、とジョッキについだビールをテーブルに置くとレフィーは急いで赤毛の大柄な女性のいるカウンターに向う。近づいてきたレフィーに、ミーアが耳元でそっとささやいた。

「今夜も、あの人が来てるよ。ほら、注文を取っておいで」

ミーアの目線の先には黒ずくめの男がいた。

マントも、着衣も、ブーツも、全部、黒。

そんな、異質な衣装をまとっているにもかかわらず、なぜかこの酒場になじんでいる男。

いつも、マントについたフードを深くかぶり、その素顔を見たものはいないらしい。

その男が、こちらを向いている。

鼓動が早まる。

気づいていた。

彼の視線が、ずっと自分を追いかけていたことに。

だが、レフィーは知らないふりをしていた。ミーアが意味深な微笑

みを浮かべるのに、レフィーはわざとため息をついてみせる。

「ミーマ！だから、私と彼は…」

「いらっしゃい！」

いつものように抗議しようとするレフィーを無視して、ミーマは新たに来た客に挨拶に行ってしまった。

「もう」

再びため息をついた彼女を調理場からミーマの夫、ダールが慰める。

「まあ、まあ。ほら、客がお待ちだぞ。レフィー」

「はい」

なぜか、彼の所に向かおうとする足は、早足になっていった。

「こんばんは」

目の前の黒づくめの男がぼそりという。

低い声が、レフィーの耳に心地よく響いた。

この男はここ3ヶ月ほど、この店にほぼ毎晩来ている。ちょうどレフィーも3ヶ月ほど前から働き始めたためか、レフィー目当ての客だと、ミーマや一部の客が騒いでいる。だが、レフィーは、この男が自分などを気にかけるはずがないと思っていた。自分のようにチビで、貧相な黒色の子供に興味があるはずないと。

薄暗い店内ではよくわからないが、なかなか整った顔立ちに思えるし、身なりは質素だが、気品や物腰から言って、それなりの身分の人物だとレフィーは考えていた。

かなり長身の男で、今も座っているはずなのに、小柄なレフィーと目線があまり変わらない。服の上からでも鍛えられているのが分かる体軀からいって、武官なのだろうか？

落ち着いたその立ち振る舞いは、彼女よりずっと年上のものに思える。

男は不愛想で、あまりしゃべらないため、レフィーはいまだに彼の

正体が掴めずにいた。

最初こそ、この無愛想さに戸惑っていたレフィーだが、今ではすっかり慣れてしまった。

「こんばんは。月も出ていて、いい晩ね。ご注文は？」

「今夜のお勧めは？」

「仔牛と赤カブのシチューです」

「では、それとビールを」

これで今晚の会話は終わりだろう。

あとは、注文の品を持ってきた彼女に、彼が「ありがとう」というだけだ。

だが、なぜか、このお決まりのやり取りを楽しんでいる自分がある。

注文を復唱し、さっさと去って行った彼女は知らない。

無愛想な男が、目元を少しだけやわらげて、彼女の後姿を見つめていたことを。

「おまちどうさま」

「ありがとう」

いつも通りのセリフだった。

毎晩繰り返される、儀式のようなやり取り。

そして、レフィーはそれに満足していた。

（だって、私はいつかこの地を去るから。）

この人と、これ以上かかわりを持てば、還れなくなる。
そんな予感がした。

彼女は、互いの運命が絡むことを拒否していた。ただ、こうして毎

晩顔を合わせられるだけで、幸せが得られると思っていた。あとになって、それは彼も同じだったということを彼女は知る。運命の糸が絡むのを感じると、すぐに互いに壁を作った。

それでも、相手に近づくことを怖れつつも、逢わずにいられなかった。

レフィーの生きる世界

竜族は、永遠に近い時を生きるといわれている。

そして、今、レフィーのいる世界は、その竜族の支配する世界。

竜族は、その魔力の性質を鮮やかな髪と瞳で示す。

王につかえる四大貴族

炎の竜族は、燃えるような赤

水の竜族は、透き通るような青

大地の竜族は、柔らかな緑

風の竜族は、きらめく紫

そして

すべての竜族を統べる者

竜の王族の色は、すべてを圧倒する金色

魔力が強ければ強いほど髪と瞳の色は濃くなる。

そして、その最高が金色。

魔力が弱ければ弱いほど髪と瞳の色は薄くなる。

だけど、闇色よりはずっとまし。

竜族の子供ならだれだって知っている。

髪も瞳も闇色の「黒色」達は支配される者たち。

その寿命は70年ほどしかないという。

魔力がないため、ろくな職にも就けない、哀れな者たち。

『黒色』と呼ばれ、虐げられ、憐れまれ、蔑まれる者達。

レフィーが、今、生きているのは、そんな世界。
漆黒の色を持つレフィー。

君は何を思うのか。

何のために生きるのか。

彼女はきつと笑って答えるだろう。

「還るためよ。」

ただ、享樂をむさぼり、飽いた生を持て余す、竜族の力などいらない。

自分は、あの方に恥じないものであればいい。

それが、己が死を意味していようとも。

脳裏に浮かぶのは、

金色の長髪を風になびかせ、

金色の瞳を輝かせて、

こちらに向かってほほ笑む女性。

「ルナ」

最愛をささげた人の名を、
心の中でそっと呼びかけ、
彼女は今日も一日を生きる。

始まりの夜。よみがえる夜。

喧嘩が起きた。

居酒屋では日常茶飯事のことだ。

だけど、いつもと違ったのは、それにレフィーが巻き込まれてしまったこと。

ここ「踊る子馬亭」に来るのは気のいい人ばかりじゃない。

なかには、黒色に差別意識を持つ人たちもいる。

そんな人たちにとって、レフィーは目障りらしい。

「あんなものに、うろつかれたら目障りだ」

「何考えてんだ、ダールは」

「黒色の触ったものなんか食えるか」

普段は、さりげなくそんな人たちを避けて接客していた。

だが、今夜は運が悪かったとしか言いようがない。

ルフィーが注文を聞いていた隣の席で、いきなり、それが始まったのだ。

「なんだよ、なんでこんなところに黒色がいるんだよ」

「んだと、もいっぺん言ってみろ」

「は、何度でも言ってるさ。黒色と同じ空気吸ってるだけでも気持ちわりいんだよ。」

二人とも相当酔っているようだった。

レフィーは注文を取ったら、さりげなく離れようと思っていた。だが、そのまえに「それ」は起きてしまった。

「とにかく、おれは黒色にうんざりしてるんだ」

そういうと、レフィーの方を向き、ハッとあざ笑うように笑う。

「こんなみすばらしい黒色のいる店なんか誘うんじゃねえよ」

その一言で、二人の空気が、一気に緊迫したものとなった。

レフィーは、機会を逃し、いつものようにうまく逃げられなかった。困ったことに、いつもと違う点がもう一つあった。

それは、いつもだったら野次を飛ばす店の客達が、やけに静かなことだった。

「それ以上言ってみろ」

一方の男が、腰の剣に手をかける。

客達が息をのむのが分かる。

「へえ、どうするって言うんだ？」

相手の男も、剣を手にする。

(まずい)

レフィーの頭の中で、警鐘が鳴る。

なぜなら、その二人は、同じ純白の軍服に身を包んでいたからだ。

二人の髪に混じる金色がほの暗い店内で、かすかに光った。

レフィーの今いる国、ラファール帝国は穏やかな国だ。

この世界は戦争がなくなり、平和といってよい状態になって久しい。

豊かな国々に、朗らかな人々。

それでも、軍というものは存在していて。

そして、この帝国最強の軍が、近衛軍隊だった。

四大貴族の中でも、特に実力のあるものだけが入隊できる軍隊。

その近衛隊だけが身にまとう、

ひとかけらの闇色が混じることも許さない、

誉れ高き純白の軍服だった。

燃えるような赤と澄んだ青がにらみ合っている。

二人は、最悪なことに、対立する魔力を持っているらしい。

いつの間にか立ち上がり、互いに剣を構えていた。

客の大半は、はすでに店の外へ逃げている。

高位の竜族の争いに巻き込まれれば、命が危ない。

頭の片隅で、早く逃げなければと思う。

二人の間で、高ぶる魔力の粒子が互いに衝突しあい、バチバチと火花を散らしはじける。

空気が徐々に加熱されていく。

逃げようと、一步引きさがったレフィーの目に、怯え互いに抱きしめあうミーマとダールの姿が映った。店の片隅には、逃げ遅れた客たちが縮こまっている。

このままだと、彼らが巻き込まれてしまう。

金色が髪に混ざるほどの実力を持つ者たちなのだ。

彼らが、少し本気を出しただけで、こんな木造の建物はあっという間に破壊されてしまう。

後になって思えば、それはとても無謀なことだった。

だが、その時には、相手が竜族だとか近衛だとか、そんなことは頭から消し飛んでいた。

ただ、ここを守りたい。

それだけを思った。

行き倒れた自分を世話してくれた店。

大好きなミーマとダール。

黒色の自分に、厭うことなく接してくれる客達。

なにより、

『こんばんは』

あの低い声をきくことのできる場所。

(失いたくない)

胸の奥底にしまった、かつての自分がよみがえるのが分かった。

ガシャンッ。

突然響いたガラスの割れる音に、男たち二人が目をやると。

酒瓶をテーブルに叩きつけたレフィーの冷え冷えとした眼が、二人を射すくめた。

手にある割れた酒瓶から、血のように鮮やかな色のワインが滴っている。

低く、それまで店の誰も聞いたことのない、どすのきいた低い声で、レフィーがつぶやく。

「…いい加減にしろ。」

そこですうっと息を吸うと、王都中にとどろくような怒声を二人に浴びせかける。

「この馬鹿ども！ 貴様ら、それでも近衛か！」

二人の男は、年端もいかない少女に怒鳴りつけられ、あっけにとられたような表情をしていた。

その、間の抜けた表情に、ますます腹が立つ。

「近衛は王都を守護する者！ 己が使命を忘れたか！ 私情に走り、関係のない民をも巻き込んで喧嘩をするとは！ 恥を知れ！」

持っていた酒瓶の残骸を激情に任せて床に投げつける。

飛び散る破片で、頬を切ったことにも気付かず、怒りにたぎる目で二人をにらむ。

「こんなものたちが、誉れ高き純白だと？ 聞いて呆れる！」

怒りが頂点に達した。ふっと表情を消し、ただ二人を静かに見つめる。

「まだ、続けるつもりか？」

先ほどの怒声が嘘のような、静かな声だった。だが、凄みを増した、その声に、二人は声を出すこともできなかった。

すでに、酔いは醒め、喧嘩をする気など失せていた。

二人は、この小さな黒色の体からにじみ出る威圧感に、完全に飲まれてしまっていた。

「続けるというのなら、こちらにも考えがある。さあどうする？
今、ここで謝罪するというのなら、許してやるが。」

その言葉に、ただただ縮こまっていた二人の青年は飛びついた。
本来、王族にしか向けないはずの最高礼を持って、謝罪をする。

「申し訳ありませんでした！」

少女が黒色だとか、年下だとかは関係なかった。

まるで上官に接しているかのようなその威厳に逆らうことなど考えられなかった。

「よろしい」

謝罪をきくと、少女は緊張をとき、一つため息をついて、苦笑する。
ああ、結局、最後には本性が現れてしまうらしい。

「剣をしまいなさい」

二人が大人しく指示に従うのを見て、少女は、ぐるりと店内を見回す。

目を丸くして自分を見つめるミーアとダール。

彼らも客達も怪我はせずにすんだ。

店内の被害は、レフィー自身が割った酒瓶だけだった。
まずまずの結果だ。

そこで、レフィーは、馴染みの視線を背中に感じた。

いつもより少し早い時間だと思いつつ振り返り、そのまま固まる。
店の入り口のところに、肩を上下に大きく動かし、荒い息をした男
が立っていた。

いつもと違うのは、その色合いだった。

純白の軍服の腰のところには立派な剣が下げられている。

乱れていても、美しい燦然と輝く金色の長い髪が、夜風に吹かれて
靡く。

紅い瞳が彼女を見つめる。

自分が息をのむ音が聞こえた。

すべてがこぼれおちる。私の手から。

土砂降りの雨だった。

おかげで今日は客が少ない。

暇そうにカウンターに寄りかかって、1週間前の晩を思い出す。

頬に張り付けた薬草にそっと触る。

傷自体は、もうほとんど消えかけている。

それでも跡が残るといけないといって、ミーアはまだ薬草をはずすことを許してくれない。

（こんな怪我、慣れてるんだけどな）

彼はあの後、金貨を一枚、手近なテーブルに置くと、蒼白になった二人を連れて去っていった。それ以来、顔を見ることがなくなった。

アーサー・グリフィス。

あれから、しばらくの間、店の話題は彼一色だった。

そして、レフィーは初めて彼について知った。

100歳にも満たぬうちに剣の才を買われ、歴代最年少で就任した近衛隊の隊長。

炎の竜族長が長男。

母親は降嫁した王妹。

現王の甥。

それなりの身分どころではなかった。

まさに、竜族の中の竜族だった。

（きっと、もう逢うこともない）

軋む心に蓋をして、それでも、誰かを待つようにレフィーは店の入り口からのぞく漆黒の闇を見つめ続けた。

この天気では、客は増えそうにないということで、レフィーは、早めに店から解放された。

人気のない、従業員用の廊下を歩きながら、雨の音を聞く。いつもだったら、このまま店の二階にある従業員用の部屋にすぐに戻る。

だが、先ほど見つめていた漆黒の闇が脳裏から離れなかった。手が、震える。

この店に来てから、起きていなかった衝動が、レフィーの体を支配する。

くると身をひるがえし、店からは死角となって見えない裏口から雨の中に飛び出した。

ミーアとダールにばれないうちに戻らなくては。

そう思いつつも、走るのを止められなかった。

走るのをやめれば、すべてがよみがえる気がして。

「汚らしい」

「お前は私のものだ」

「虚無に落ちた」

気がつけば、大広場で天を見上げていた。

雨が、顔を、肩を、全身を、叩く。

己の手すら見えぬ闇の中で、必死に天に向かって手を伸ばす。掴めるはずのないものを掴もうとした手から雨が滑り落ちる。

「ルナ」

虚空にその名を呟く。

「ルナ」

彼女の名の由来である月すら見えぬ今夜のような日は、いつもこうであった。

ただ、闇の中で彼女を探した。

「ル・・」

再び彼女の名を呼ぼうとしたその声は、後ろから抱きしめられたことで途切れる。

「レフイー」

いつの間にか背後に来ていたその人が、だれかは、顔が見えなくとも分かっていた。

低く深みのある声で名を呼ばれ、安堵に、体の力が抜け、その人物にもたれかかった。

（ああ、そうだ）

彼女は気が付いてしまった。

（この人に会ってからだ。私が、ルナを探さなくなったのは）

薄れゆく意識の中で、彼女が最後につぶやいたのは、かつて最愛を贈ったものの名ではなかった。

「アーサー」

名を呼ばれたことで、男の目に宿った光にも、さらに強く抱きしめられたことにも気付かず、

彼女は意識を手放した。

暖かな朝

ふかふかする。

レフィーは、その心地よい感触を懐かしく思う。

店の部屋は、こざっぱりとしていて、必要なものもそろっているが、ふかふかなベッドなど、望めるわけがない。

いつも抱いて眠る剣がなぜか腕の中にない。

探索の腕が滑らかなシーツの上をさまよう。

違和感に目を開くと、見慣れぬ光景が広がっていた。

大きな部屋だった。

家具は統一された優雅なデザインで、落ち着いた色合いだ。

自分が、大きく真っ白なベッドに横たわっていることに、レフィーは混乱した。

(え?)

思わず飛び起きる。

必死で昨夜のことを思い出しつつ、無意識に剣を探す。

突然、視線が止まる。

昨夜のことが脳裏によみがえる。

いっそ、すべて忘れてしまいたくなった。

抱きしめられた感覚がまだ残っている。

名前を呼ばれた気がする。

名前を呼んだ気もする。

「起きたか」

聞きなれた声に、彼女がびくりとして振り返ると、今、一番合いたくない人物が戸口に立っていた。

「あ、あの・・・」

二人の間に、なんともいえない沈黙が落ちる。

「はい、はい」

そこに、老婦人が手を打ちつつ割り込んできた。

「女性の部屋に断りもなく入るなんて。何をお考えですか？ グリフィス様」

婦人は、あきれたように、首を振る。

「取りあえず、身支度をいたしますので、一度お出になられてください」

グリフィスはまだ何か言いたそうだったが、女性に追い出されてしまった。

「あ、あの・・・」

ためらいがちに呼びかけると、深々とお辞儀をされた。

「お初にお目にかかります。グリフィス家のメイド長をしております、タレス・ジーナでございます。よろしくお願いいたします。レフィー様」

「よ、よろしく申し上げます」

思わず、返事を返すと、優しく微笑み返された。

「では、ご支度をはじめましょう」

「え？」

次の瞬間、ばあんっ、と閉じていた扉が開き、メイドたちがなだれ込んできた。

「まずは、湯あみから・・・」

じりじりと近づいてくるメイドたちに、後ずさりしつつ、レフィーはふと思う。

（なにが、どうなっているの？）

だが、今はそれどころではなかった。

書斎にいたアーサーは、悲鳴を聞いた気がして、本から顔をあげた。今日は、一日中、屋敷で過ごすつもりだった。

この一週間、部下をしごいて、しごいて、しごき倒していたのだが、ついに昨日、副隊長から、休暇を取るよう懇願されてしまったのだ。「このままでは、近衛隊が壊滅してしまいます。」

その、大げさな物言いに苦笑したのだが、後ろで固唾をのんで見守る隊員たちに気付いた。

全員、体じゅうに痣と打撲があり、疲れ切った表情をしている。

特に、ひどいものが2名いた。

あの居酒屋で問題を起こした者たちだ。

ただ謹慎にするよりも、自分が性根を叩きなおしてやろうとしたのだが、

これも途中で、

「性根を治す前に、死んでしまいます。」

と、半泣きの副隊長に止められてしまった。

ぼろぼろの隊員たちを見て、悪いことをしたと思いつつも、あの程度でこんなことでは困ると思う。

（あれのどこが「あの程度」ですか。と涙目で訴える副隊長が脳裏に浮かんだが無視する。）

気持ちを切り替えることが確かに必要だった。体を動かすことだけでは無理のようだったので、おもいきって3日だけ休暇を取ることにした。休暇を取るなど、何百年ぶりだろうか。

そして昨晚、彼女を『捕まえた』。

偶然だった。

休暇の連絡を各所にした帰りに、何となく大広場に出ると彼女がいた。

ずぶぬれになって。

思わず抱きしめると、そのあまりの冷たさにぞっとした。
気が緩んだのか崩れ落ちる彼女は、最後に。

（確かに、俺の名を呼んだ）

名をよばれた瞬間の自分の感情を何と呼べばよいのかはわからない。
あんな感情初めてだった。

だが、ひとつだけわかったことがある。

俺は、もう、彼女を手放せなくなるだろうと。

ノックの音が部屋に響いた。

「入れ」

短く命じると、誰か遠慮がちに部屋に入ってくるのが分かった。
使用人らしくないその態度を奇妙に思い振り返り、グリフィスは硬直した。

赤いドレスを身にまとい、化粧をし、
長くつややかな黒髪を背に流した彼女が、そこに立っている。
白い肌が、その色鮮やかさを引き立てる。

おずおずと微笑みかける彼女に、
頭の中で何かのはじけ飛んでいくのが分かった。

青空を見せてくれた人

訓練場に行くというアーサーを見送って、レフィーはもといた部屋に戻った。気の利くメイドが用意してくれた紅茶を飲みつつ、窓の外を見やる。

ああ、昔を思い出す。

昔。

私が、『飼われて』いたときのことを。

汚らわしく、おぞましい、

黒く、黒く、塗りつぶされた過去のことを。

それは、遠い国の話。

その国では、黒色は獣として扱われていた。

そこで、レフィーはある竜族に飼われていた。豪華な食事を取り、色とりどりの衣装を着て、素敵な部屋の中でレフィーは飼われていた。庭に出ることすら許されず、首には呪鎖をつけられ、話し相手もない生活。

そこに、現れたのがルナだった。

客人としてきた彼女は、レフィーを外の世界に、連れ出してくれた。

どこまでも広がる空。窓で四角く区切られた空しか見たことのなかったレフィーの知らない世界。彼女は、ルナは、私に空を見せてくれた人だった。

紅茶を揺らす。

琥珀色の液体が必死にカップにしがみつく。

レフィーも必死にルナにしがみついた。

だが、大切なものはいつだって、私の手の中をすり抜けていく。

ルナは、賢く強い女性だった。

自分の道を自分で切り開く人だった。

家名に頼らず生きるため、軍に入ったのだ、と笑って言っていた。
そんな彼女に仕えることが自分の喜びだった。

だが、彼女は虚無に落ちてしまった。

虚無。それは、この地の果てにある深き歪んだ黒空。

それは、地獄への道とも、この世ならざる地と繋がっているとも、
すべてを無に帰す穴だともいわれている。

本当のことは、何一つわからない。

わかっているのは、それに落ちれば二度と帰れないということだけ。

そして

そして落ちたのだ。

ルナが。

虚無に。

彼女は軍人だった。その任務中のことだった。

彼女がこの世にいない。そう思うと、屋敷のすべてが苦痛に思えた。

彼女の好きだったティーカップ

彼女が立っていた階段

彼女が愛した花

すべてが
色鮮やかに
彼女をよみがえらせる

どうしようもない衝動に駆られ、レフィーは屋敷を飛び出した。

その後のことは、よく覚えていない。気づいたら、ミアとダールに拾われていた。死ぬことはできなかった。誓いがあったから。彼女に恥じない生き方をする。それが、私の誓い。

だが、レフィーは生きる気力を取り戻せなかった。空っぽの心を抱え、日々は空しく過ぎて行った。

そう、あの日までは。彼が初めて店に姿を現した、晩までは。

あの、晩のやり取りが、胸の奥に何かを灯すまでは。

脳裏に、いつかの彼女のセリフがよみがえる。

『レフィー。いい？ 本当に欲しいのはあきらめてはだめ。しっかりと捕まえて離しちゃだめよ。そして、運命を切り開いていくの』

昨晩のことを思い出す。

初めて名を呼んだ、呼ばれた。

その時、胸の奥から湧き上がった感情は。

『離しちゃだめよ』

うん。ルナ。わかっている。

今度こそ、離さない。

急いで紅茶を飲み干すと、レフィーは部屋を出た。

夢か幻か。・・・うん。悪夢だな。(By シオン)

「へ？」

我ながら間の抜けた声だと、近衛隊副隊長、マイト・シオンは思った。

目の前に、死屍累々と部下たちが転がっている。

そして、その中心に立って、最後の一人と闘っているのは、……ここにいるはずのない人だった。

そろそろ昼時なので飯に部下を誘おうと訓練場に来たところ、この状態だった。

「な、なんで。あなたがここにいらっしゃるのですか、グリフィス様——！」

シオン副隊長の悲痛な叫び声が今日も訓練場に響く。

どさり。

最後の一人が力尽きて倒れた。

そして、グリフィスの紅い瞳がシオンを捉える。

(や……)

グリフィスがこちらにむかってくる。

その眼は。

(殺^やる気だ——！)

腰の剣に手をかけつつ、後ずさりをして、何とか逃げようとする。

救世主は、意外なところから現れた。

「アーサー？」

殺伐とした訓練場に不似合いな、澄んだ少女の声がシオンの後ろか

らした。

と、グリフィスの体から殺気が消え、なぜか、シオンの方に向かい微笑みかけている。

（（（（グリフィス隊長が笑った——！！））））

無愛想、無骨、無感情が代名詞の彼が。

死んだふりをしたまま、こちらをうかがっていた部下たちが、信じられないという顔でグリフィスを凝視する。グリフィスはそれに構わず、微笑んだまま、口を開いた。

「こちらに來い、レフィー」

気味が悪いほど優しい声だった。

あの隊長のどこからこんな声が出てくるというのか。
固まったままのシオンの横を、黒髪の少女が通り過ぎる。

白い少女だった。

髪と瞳こそ黒いが肌は近衛隊の制服のように真っ白だ。

その髪の色と肌の色の対比が、また……。

そんなことを考えつつ彼らが少女を見ていると、隊長のグリフィスは少女を抱きしめ、その髪に顔をうずめた。

再び固まる観衆を気にすることなく、グリフィスは嫌がる少女を腕の中に閉じ込めた。

そして、周りにいる男たちを鋭く睨む。

（ああ、そうか）

上司が何を言いたいのかわかり、シオンは苦笑する。

（つまり、僕たちを牽制しているわけか）

少女の白い首筋が、徐々に赤くなっていく。

「そういうわけだから」

何がというわけか、まったく訳が分^{わけ}からん。

近衛隊全員の心（隊長を除く）が一つになった瞬間だった。

さっきまで倒れ伏していた部下達はボロボロなままではあったが、グリフィスの前に整然と並んでいる。

厳粛な軍の様子に見えるだろう。

肝心の隊長が、腕の中に少女を抱えたままではなければ。

だが、そんな周りの思いにも気付かず、グリフィスは、話を続ける。

「今日から3日間、休暇をとる。屋敷をあけていることもあるだろうから、緊急の時は連絡石を使い。シオン、あとは任せた」

「は、はい」

結局、なぜグリフィスがここに来たのかはわからなかったが、大人しく休暇に入ってくれるならそれでいいと、シオンは思う。

その時、少女がするりとグリフィスの腕から抜け出した。

そして、整然と並ぶ隊員たちの中の二人の元へ駆けていく。

シオンは、自分の顔が引き攣るのが分かった。

隊員たちは、隊長の瞳に宿った剣呑な光に恐怖した。

「先日は怒鳴りつけたりして申し訳ありませんでした。是非またお店にいらしてくださいね。」

そんな周囲を知ってか知らずか、少女は顔色の悪い二人に話しかける。

「失礼いたします」

(・・・おや?)

少女が二人にした礼は、ただの黒色とは思えないほど、優雅なように思えた。

不思議に思っ、上司に尋ねようかと顔を向けて、ぎよっとする。

怖いぐらいの微笑みが、その顔にはたたえられていた。

その表情のまま彼はシオンを見た。

（怖いです、隊長！ 目、目が、笑ってない！）
だが、部下のそんな心の叫びにも気付かずに、グリフィス隊長は、優しい声で囁くように言った。

「やはり、隊長が長くいないというのは問題があるな」
そんなことないと、首をぶんぶん振る副隊長を無視して、隊長は続ける。

「明日も、稽古だけはつけてやろう」

そして、青を通り越して、白くなっている二人の隊員に目をやる。

「レフィーも、あの二人に目をかけているようだし」

——あいつらを逃がすな。

目で、シオンに命ずると、グリフィスは戻ってきた少女を捕まえ、引きずるようにして去っていった。

嵐は去った。

とりあえず。

「さて」

シオンは爽やかな微笑みを浮かべて呟いた。
件の二人を隊員達に取り囲む。

「お前達が知っていることを全て包み隠さず話せ」

断末魔の叫び声が、訓練場に響き渡った。

そして物語は始まる。(完)

困った……。

屋敷に向かう馬車の中で、アーサーは内心焦っていた。

あのままでは、少女に何をするかわからず、
取り合えず訓練でもすれば気がまぎれるかと思ったのだが……

逆効果だった。

自分以外の者に笑いかける少女を、
このまま永遠に屋敷に閉じ込めておきたいと思う自分は、
どこかが狂ってしまっているに違いない。

対して、レフィーも困っていた。

彼のもとへ着たはいいが、どう切り出せばいいかわからない。

一生、彼と一緒にいたい。

そう、伝えようと思ったが、本人を前にすれば、高鳴る胸を押さえるだけで精いっぱいだった。

お互いに気まずく、馬車のなかに沈黙が落ちる。

「そういえば、なぜ、訓練場に？」

ふと、気になってた尋ねれば、レフィーはふいっと目をそらして黙
り込んでしまった。

答えないレフィーにグリフィスは笑って言う。

「まあ、いい。それより、お前に渡しておきたいものがある」
そう言うと、レフィーの隣に移動してきて、その手をそっと取った。

「レフィー」

そうやって彼が指にはめたのは。
永遠を約束した恋人同士が交わす輪だった。

「レフィー、三ヵ月後、火冠の月に結婚する」

メイド長と母上が聞いたら卒倒しそうな日付だった。三ヵ月で、式場、衣装、招待状、料理、花：その他もろもろを用意するのに彼女たちがどれほど苦労したかを、彼は後々まで愚痴られる羽目になった。

レフィーは、自分の指にはめられた銀色の輪を、信じられないという風に見つめた。

そして、緊張の面持ちをしたアーサーに告げた。

「昔、心から愛した人がいたの」

爆弾発言だった。

盗み聞きしていた御者は、危うく手綱を落とすところだった。
効果抜群の火薬が、グリフィスの胸を焦がす。

おもわず、白くなるほど手を握りしめ、激情を抑え込む。
今ならば、王都を焼き尽くさんとした狂王の気持ちがかかるかもしれない。

そんな彼に、指輪を凝視し続けるレフィーは気付かない。

「だけど…。だけど、その人は、もう、この世にいない。だから…
：アーサー」

彼女が彼の眼を見つめる。

深い漆黒と燃える赤が交差する。

「私をあなたに捧げるわ。だから、最期の時まで、ともにいてくれる？」

レフィーが問う。

「俺が、俺を捧げるのは、おまえだけだ。最期の時まで、決して離しはしない。お前がどんなに嫌がろうと。その覚悟はあるか？レフィー？」

アーサーが問う。

クスリ、とお互いの顔を見合せて笑った。

炎の竜族長アーサーとその最愛の妻レフィーの物語が、今、動き出した。

そして物語は始まる。 (完) (後書き)

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

【番外編】パンドラの箱

『そして物語は始まる。』番外編 サイド…レフィーの友人A
(ネタバレ注意。本編読了後お読み下さい。)

『パンドラの箱』

その日は、快晴だった。

休暇中の友人Aは、青空が大好きだった友人を思い出し、あいつ、
元気にしてるかな？ などと思いつつ、家の掃除をしていた。
足元でちょこまかしている子供達を、外で遊んでなさい！ と追い
出すと、ちょうど郵便屋が来たところであった。

「Aさん。郵便です。」

やけに大きな箱が届き、友人Aは首をかしげた。

んん？ 誰だろう？

送り主を見て、友人Aは目をみはった。

慌てて、箱を開けると、一回り小さい箱と、手紙が入っていた。

「

ごめんなさい。結婚します。幸せです。

他の人への結婚式の招待状を同封します。よろしくお願いします。

親愛なる友人Aへ 愛を込めて レフイー

」

箱を開けてみれば、確かに、中には、ぎっしり招待状がつまっている。

律儀な彼女のことだ、この招待状一つ一つに、それぞれへのメッセージが書いてあるに違いない。
一体、何日かかったのだろう。

実家に子供達を預ける算段をつけながら、友人Aは決意した。
とりあえず、会ったら文句言ってやる。

「ごめんは余計だ」

元気にしてたんだったら、それでいいのだ。・・・幸せなんだたら、それでいい。あいつは、あの方の分も、幸せにならなかったら、それこそ、許さない。

なんやかんや言いつつ、笑顔であった友人Aは、自分の招待状を開いて、目を剥くことになる。

『ごめんなさい』ですむ問題か！ むりっ！ うわあ、どうすんだよ。

暴走しそうな上司Xとか同僚Yとかを考え、レフイーの友人であり、元部下である友人Aは、これから起きるであろう騒動を考えて、頭を抱え込んだ。

それは、よく晴れ渡った日のことであった。横暴な上司に振り回さ

れ、滅多に家に帰らなかったため、妻に実家に帰られ、子育てと家事に翻弄されている友人Aのもとに、さらなる心労のもとが詰まった、その箱が届いたのは。

結婚式の二次会で、我が道を行く上司についていく大変さを語りあう友人Aとシオンの姿がみられたという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0527o/>

そして物語は始まる。

2010年10月10日15時00分発行